

「声」の記憶

——ローベルト・シューマンの『幻想曲』再考——

佐藤 英

ローベルト・シューマンの『幻想曲』の第1楽章は、楽章の末尾に主題が登場する特殊な構造をしている。彼が主題に用いた旋律に寄せる思いは強く、『クライスレリアーナ』の第2曲と第3曲、『夜曲』の第4曲、交響曲第2番の第4楽章などに、『幻想曲』で用いられたのと同様の旋律を登場させている。ヘルマン・アーベルトは『幻想曲』の解釈に際し、この旋律の由来をベートーヴェンの歌曲集『遙かなる恋人に寄す』の一節「この歌を受け取って欲しい」に求めたことで、こんにち広く支持されている見解を示した。しかし、先に述べたシューマンの作品群のすべてを、この歌詞と関連付けて理解することは不可能である。着目すべきはむしろ、上記の作品群において問題の旋律が、突然、現れてくる点にある。それがシューマンのトラウマと関わりを持っているという見地に立つと、上記の作品群の成立過程の背後には、いったい何があることになるのか。この問いに答えるために本発表では、先の作品群を視野に入れた包括的観点から、問題の旋律の意味を新たに捉え直すことを試みた。

上記の作品の個々の成立史を確認すると、それらの作品がいずれも、対象喪失の恐怖のうちで作曲されたことがわかる。問題の旋律が突然登場するのは、シューマンの内面にふと沸いた不安を反映するためなのだろう。この旋律がそのような対象喪失の恐怖を示すメルクマールとなるに至った契機は、シューマンが『遙かなる恋人に寄す』をアグネス・カールスの歌によって知ったことにあると推測される。シューマンはアグネスに恋愛感情を抱いていたが、彼女が人妻であったために、その思いは成就しなかった。しかし、この恋愛体験がシューマンに残したものは少なくなく、失恋の克服として作曲されたと考えられる『6つの間奏曲』には、彼女が歌った歌曲の引用（シューベルトの『糸を紡グレートヒェン』とベートーヴェンの『遙かなる恋人に寄す』）が認められる。このことは、シューマンにとって彼女の声によって得た体験が、得がたいものであったことを暗示している。この体験が、ロラン・バルトの言う「落ち着きのない身体」の持ち主に特有の分裂的思考のうちで咀嚼されたとしたらどうなるだろうか。アグネスの声によって記憶された旋律は、意味の転換を起し、大切なものを失うことへの恐怖を示すものとして、シューマンの記憶に定着する可能性が大きいのである。